

**岩手県東日本大震災津波復興委員会 女性参画推進専門委員会**  
**令和3年度オンライン現地調査の概要について**

**1 目的**

女性参画の推進に関する現状や課題を調査し、専門的な見地から復興推進プランの進捗等に関する意見をいただき、「復興推進プラン」の推進に反映させる。

**2 実施日**

令和3年12月22日(水) 午後1時30分から3時まで

**3 調査のテーマ**

- (1) 震災後に設立された女性・子ども支援を行うNPO等の現状について
- (2) 沿岸部で働く女性を取り巻く環境について

**4 調査対象者等**

市町村	調査対象者	概要
大船渡市	NPO法人こそだてシップ 理事長 伊藤 怜子氏	平成25年5月設立 大船渡市子育て支援センター「すくすくルーム」等を運営するなど、震災直後から妊婦や乳幼児及びその家族を対象とした子育て支援事業を実施している。
山田町	株式会社びはん 営業統括マネージャー 椎屋 百代氏	山田町観光協会事務局次長や新生やまだ商店街協同組合事務局長を経て現職。 現在は、町内2店舗の統括マネージャーとして従事している。

**5 出席委員**

菅原悦子委員長 盛合敏子副委員長 大沢伸子委員 神谷未生委員 高橋弘美委員  
手塚さや香委員 中里登紀子委員 平賀圭子委員 山屋理恵委員 両川いずみ委員  
計10名

**6 議事録**

**(1) 開会**

**○米内復興防災部復興推進課主幹兼推進担当課長** ただいまから岩手県東日本大震災津波復興委員会女性参画推進専門委員会オンライン現地調査を開催します。

本日は、令和元年度まで実施していた現地調査について、新型コロナウイルス感染症を考慮し、被災地の事業者の皆様とオンライン会議形式により意見交換を行うこととしたものでございます。

本日は6名の委員にZOOMにより御出席をいただき、菅原委員長含め3名の委員には、ここ事務局会場から御出席いただいております。

なお、前回委員会より委員の異動がありましたので、新任の委員の方を御紹介させていただきます。

岩手県歯科医師会理事の中里登紀子様でございます。

また、本日は、調査対象者として、NPO法人こそだてシップ理事長、伊藤怜子様と株式会社びはん営業統括マネージャー、椎屋百代様のお二方にも大変御多忙な中、オンラインにて御出席をいただいております。

それでは、現地調査に先立ちまして、戸舘復興防災部長から御挨拶を申し上げます。

**○戸舘復興防災部長** 復興防災部長の戸舘でございます。本日は、皆様年末何かと慌ただしい中を東日本大震災津波復興委員会女性参画推進専門委員会オンライン現地調査に御参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

また、NPO法人こそだてシップの伊藤理事長様、株式会社びはんの椎屋営業統括マネージャー様におかれましては、本委員会の調査に快く御協力をいただけるということで、重ねて御礼を申し上げます。

本専門委員会によります現地調査でありますけれども、復興の取り組みにおける女性参画の推進に関する現状や課題を調査いただきまして、専門的な見地から御意見を頂戴するというので、平成26年度から実施しているものでございます。これまでは沿岸部で主に暮らしの再建やなりわいの再生に取り組まれている方々を訪問させていただきまして、課題や行政に求める支援に関する意見交換等を通じまして、委員の皆様から県の復興施策に対する様々な御提言をいただいているところでございます。昨年度は、残念ながら新型コロナウイルス感染症の拡大によりまして、現地調査ではなく委員の皆様による意見交換という形で実施をさせていただいたところであります。

今年度は、菅原委員長からの御提案もありまして、オンラインによりまして沿岸被災地で女性や子供の支援事業に取り組まれている方、そして女性の事業者の方からの生の声を伺った上で意見交換を行いたいということで、こういったオンラインの形での現地調査とさせていただきました。

本日は、「震災後に設立された女性・子ども支援を行うNPO等の現状」について伊藤様から、「沿岸部で働く女性を取り巻く環境」について椎屋様からそれぞれ御自身が取り組まれている事業等を通じまして、ふだん感じられていることとお話しいただいた上で意見交換とさせていただきたいと存じます。

皆様から頂戴いたしました御意見を今後の復興の取り組みに反映させてまいりたいと考えておりますので、本日限られた時間ではありますけれども、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## (2) 調査対象者との意見交換

**○米内復興防災部復興推進課主幹兼推進担当課長** それでは、ここからは菅原委員長に進行をお願いしたいと思います。

先ほどお話しさせていただいたとおり、先に山田町、椎屋様のほうからお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

菅原委員長、よろしく願いいたします。

**○菅原悦子委員長** それでは、意見交換に先立ちまして、それぞれの方から現状についてお伺いしていきたいと思っております。

初めに、「沿岸部で働く女性を取り巻く環境」について、株式会社びはん営業統括マ

ネージャーの椎屋さんのほうからお話を伺いたいと思います。

では、よろしく願いいたします。

**○椎屋百代氏** よろしく願いいたします。それでは、びはん株式会社の椎屋と申します。皆様、声聞こえていますでしょうか、大丈夫でしょうか。どうぞよろしく願いいたします。

震災前の取り組みと震災後の活動についてということでお話しさせていただきたいと思しますので、どうぞよろしく願いいたします。

まずは、自己紹介というところがございますけれども、私は大分県の佐伯市という九州一大きい市の出身でございます。まだ私が大分にいた頃は大きくはなかったのですけれども、近隣の市町村合併によって九州一大きい市ということになったようでございます。

私は、高校卒業後、東京のほうに上京して就職、その後ちょっと早めに結婚に至りまして、出産、育児ほかなどというところで、皆さんの御想像にお任せいたしまして、いろいろ経験して、岩手に来る前は東京のカフェチェーンのスーパーバイザーをやらせていただいております。

その後、2006年に岩手県に定住しております。

山田町に来て最初に働き始めましたのが山田町商工会の臨時職員でございます。事務職かと思って入社したのですけれども、山田の魅力発信実行委員会という山田で四季ごとで開催する祭り担当をさせていただくことになりました。

その中で、三陸山田カキまつり、皆さん御存じかとは思いますが、ほかに夏にはオランダ島ビーチフェスタ、秋には山田祭り、そして冬には鮭まつりと、お祭りのほうに関わらせていただいて、山田のことをどんどん知っていくわけでございます。

中でも、町として協力して特産品であるカキを食べ放題で食べられるかき小屋の立ち上げにも参加させていただきまして、たくさんのお客様に美味しいカキを召し上がっていただいたことはとても達成感はございました。

4年間の商工会の経験を積みまして、山田町観光協会のほうに転職いたします。町の観光の発信をするべく道の駅やまだに観光案内所を新設させていただいて、観光の発信、またホームページやブログの開設、テレビでのPRやエージェント訪問など行いまして、山田の魅力を発信し始めた頃に起こったのが東日本大震災でございます。

3月11日はたまたま1時間前に観光案内所に戻っておりまして、夕方にはベアレンビールさんとかき小屋でベアレンビールを楽しむ会という夜の部の準備に取りかかろうか、さあ、行こうかという話をしているときに地震、そして津波と、自分の人生の中ではこのようなことに遭うなんて思ってもみておりませんでした。九州出身ですので、地震イコール津波というのが私の頭には正直言ってありませんでした。

そのときによぎったのは、この後のかき小屋のお客様や当時働いていた観光協会のかき小屋スタッフも心配ではございました。

心配しておりましたかき小屋のスタッフは無事でした、ここから数日協会の職員の安否確認など数日いろんなところを走り回っております。4月から指定管理が決まっております鯨と海の科学館も、皆様今見ていただくように御覧のありさまで、手のつけようがないという状況の中、自分が何をすればいいのだろうと自問自答しておりました。

3月21日に何度も、何度も携帯で書き直しながらブログを発信しました。その反響に物すごく驚かされて、たくさんの方々がコメントを寄せていただきました。それからです、山田町の今の現状を伝えるべくたくさんの炊き出しの御案内であったり、配給の様子であったり、義援金の御案内であったり、逆に町の今を町に戻ってこられない人や情報を知りたい人へ発信し、たくさんの輪が出来上がりました。

その中で、自分自身も助かった一人として炊き出しのお手伝いを行うこともさせていただきました。幸い私には身内に亡くなった人とか、自分自身は無事でしたので、何とかしなければならないという・・・助けてあげたいという思いが働いたのだと思います。芸能人の皆さんであったり、ベアレンビールを楽しむ会で本来やろうとしていたベアレンビールの皆さんであったり、災害ボランティアの皆さんや町おこし集団として働いていたやまだ夢プロジェクトのメンバーであったり、私はここで現在の職場であるびはんの間瀬と一緒に活動をしていきます。

その頃は、仕事には実は1年後には行き詰まって悩んでいた頃に間瀬に出会い、新しい商店街を一緒につくってほしいという声をかけられて、観光協会を退職いたしまして、びはんに入っております。

びはんでは、地域連携推進室という部署を立ち上げていただき、町のために何でもやってほしいという間瀬の要望に応えるべく取り組んでいき、一日も早く商店街をつくるために新生やまだ商店街の事務局長として業務を一緒にやっていきます。この22の事業者とともに活動してまいりました。

グループ補助金に採択されるために、魅力的な山田町をつくる新生やまだ商店街グループとして事業を展開してまいります。

こちらが当時の未来構想です。私たちの場所は、海側の国道沿いに商業施設の絵が、ちょうど中心、真ん中ら辺にピンクの商業施設という文字が入っているところですが、そのエリアで商売を始めようというところでいろんな事業を始めたいと思います。中心地とは少し離れますけれども、全体構想の中にも町が私たちの取り組みを取り込んでいただいて、新しい街を形成していきます。

商店街ができる前から私たちは数々の取り組みを行ってまいりました。街なか観光としてです。震災語り部を商店街が行う震災語り部ガイドです。現在はそれに食の体験をプラスし、復興まち歩きつまみ食いツアーを行っております。もちろん震災語り部ガイドも行っておりますが、中には語り部タクシーというも行っております。

また、今コロナでちょっと延期しているのですが、「いちび」というにぎわいを創出する「いちび」の開設や山田町で結婚式を行う「やまだぶらいど」、子供向けのイベントなど、様々な事業を積極的に行っております。

震災後は、生かされた者として震災前よりも魅力的な山田町にするのだという思いが本業のびはんの仕事をしつつ、新生やまだの事務局としてやってまいりました。この年の3月末で事務局を卒業させていただいて、本業のびはん株式会社で2店舗を展開するびはんストアの営業統括マネージャーをさせていただいております。なかなか管理職というのが女性は少ないです。今現在もびはん株式会社の管理職は私1人です。また、びはん株式会社というのはマイヤ、皆さんも御存じでしょうか、大船渡が本社になりますけれども、マイヤの業務と一緒にやっておりまして、そのマイヤの中でも管理職は数を

数える程度でございます。私の取り巻く環境としては、女性の方が管理職にまでなるといふところはなかなか厳しい状況ではある、そして男社会だなといふところを今ひしひしと感じております。

簡単でございますけれども、私からは以上となります。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

それでは、委員の皆さんから椎屋さんについて何か御質問や御意見はありませんか。

では、私たちは今、なかなか現地には行けていないのですけれども、今コロナ禍も含めて、椎屋さんの周りの山田町の商店街にいる女性の皆さんは、何かお困り事とか、商店街の中で課題とか、そういうことがありましたら、少し具体的な話をしてもらってもいいでしょうか。

**○椎屋百代氏** 商店街の人たちにとっては、私の新生やまだ商店街のほかにもうみねこ商店街という商店街が別にあります。それがちょうど駅前のエリアにある商店街になるのですけれども、そことの連携ですね。あとは、そのほかにもまちなか振興会という、ほかにも振興会がありまして、そことの連携というのが結構課題かなとは思っております。中には結構女性の商店主さんであったり、事業所の奥様だったりという形で女性の方々は結構いらっしゃることは確かなのですけれども、今ややっぱりコロナで厳しい状況ですので、なかなかまとまりにくくなっているというのが正直なところではあります。

**○菅原悦子委員長** では、はい。

**○高橋弘美委員** 椎屋さん、はじめまして。私は高橋といいます。実は15歳まで山田におりまして、縁があってこちらにいますのですけれども、嫁いだのですけれども、10年前に自分も親戚とか様々あって、山田にはちょこちょこ行っていました。ただ、おたくのことが分かれば寄ったのになと思いつながら残念で、今思えば、これからは連絡をとっていかうかなと思いました。

11月の頭に行ったときには町内の知り合いの飲食店で昼食してきました。あそこの奥さんは私の知っている方で、旦那さんが亡くなったのですけれども、山田の人間は、私はこのとおりの早口で、そして口は悪いけれども、腹（なか）はいいよというくらい男気のある人が多いですよ、山田ってね。それで、震災前と今はどう違うのかなと思って見ていると、元気でした、彼女は。そして、これからも頑張って息子とやっていくのだといふのがあるのですが、全般的に見て、商店街の奥様たちといふのはどんな感じに変わられていったかをちょっと教えていただければと思います。いいほうに変わっていったとは思いますが、まだ課題はあるかとは思いますが。

**○椎屋百代氏** 確かに今の商店主さんのお母さんだったりとか、昔と今とあまり変わらず、本当にパワフルな人たちばかりなのですけれども、その後の方々ですね、後継者といふとあれなのですけれども、もうちょっと世代の若い方々が逆に少ないかなといふところが正直あるかなといふふうには思っています。

**○高橋弘美委員** 聞いた話ですと、連携はしているのだけれども、様々プライバシー、そこまで深いつき合いができなくなったのが非常に残念だと、個々で事情が違うので、同情したりとか、そうではなくて、本当にお腹の底から付き合えるのが少なくなったねといふことを言っていましたね。それは仕方がないことだとは思いますが、元気で頑張っていたいただきたいと思って、滝沢のほうから応援している一人として、ちょっと縁があ

りまして、お話ししました。

まず、頑張っていたきたいと思って、エールを送るのみですけれども、頑張ってください。

○**椎屋百代氏** ありがとうございます。

○**菅原悦子委員長** 手塚さん、お願いします。

○**手塚さや香委員** 釜石の手塚です。よろしくお願いします。

椎屋さんの先ほどのお話の最後に、びはんさん、マイヤさんともにまだまだ管理職に女性が少ないということだったと思うのですが、椎屋さんから御覧になってその理由というのはどういうところにあるとお感じなのかなというのが一つと、あと椎屋さん御自身が間瀬社長からなのか、今のポストにというふうに言われたときにも椎屋さん御自身も何かちゅうちょするようなことがあったのか、それとも結構即決でやりますという感じだったのか、その辺りを教えていただければと思いました。

○**菅原悦子委員長** お願いします。

○**椎屋百代氏** 正直畑違いなのですよ、今のお仕事というのが実を言うと。普通のスーパーの営業統括なのですけれども、全くそういうスーパー業に入ったことがなくて、急に言われて、でもほかに人がいなくてやるしかなくて、そんな状況で今飛び込んでやっているような状況です。

働く環境の中で、管理職が少ないというのは、結構重要なポジションなのです、営業統括というのが。店長さんももちろん大事なポジションではあるのですが、その核、中心となる司令塔みたいなところになってくるので、そこの仕事をするということに当たってはいろんな経験とか知識だったり、私はまだまだ知識はないので、一生懸命やっているところではあるのですが、そういった知識を得るためにかなり時間が多分かかると思います。その知識を習得するための時間が、もし女性の場合が結構厳しいのではないかなというところですが、正直言うと。やっぱり子育てだったり、育児だったり、家事だったり、いろんな女性としてやる仕事もしつつ、今のこの仕事をするとなった場合、私は結構きついかたと正直思っています。私は子育てももう全部終わって、あとは孫の顔を見るだけみたいな形になっていましたので、仕事に専念できる環境にあるので、今のところ一生懸命やらせていただいているのですが、子育てしながらという場合はちょっとこの仕事はきついかたといいうふうに感じております。

○**菅原悦子委員長** よろしいですか。

○**手塚さや香委員** ありがとうございます。今のお話ですと、勤務時間というか、業務内容のボリューム的に子育てとの両立というのは難しいというのがネックという認識で合っていますか。

○**椎屋百代氏** そうですね、合っていると思います。

○**手塚さや香委員** 分かりました。ありがとうございます。

○**菅原悦子委員長** ほかにいかがでしょうか。

大沢さん、お願いします。

○**大沢伸子委員** 野田の大沢でございます。今日はよろしくお願いいたします。

商工会のほうからちょっとお尋ねしたいのですが、震災直後に岩手県商工会女性部は山田町、大槌町の被災、被害の大きかったところを何とかみんなに元気を取り戻

してもらおうということで、前会長でありました松田会長が山田町のほうに出向きまして、商工会の女性部に元気を与えようと、何かやる気を起こさせようというので、つるし雛づくりとか、女性部の皆さんを集めて、御家族が犠牲になられた方たちもみんな集まって、とにかく元気を出そうと、これがモットーで一生懸命頑張った経緯がございます。

今びはんさんのお話を伺っていて、先ほどの発表の中で、うみねこ商店街とか、まちなか振興会との連携をしてというお話がありましたけれども、山田町商工会女性部の位置というか、関わりというか、それが具体的にお聞かせいただければ。何しろ商店街というのは、小さな店の集まりでございまして、どうしても大型店には勝てないという状況なのですが、そこの皆さんたちとの関わりを少しお聞かせいただければいいかなと思いますので、よろしく願いいたします。

**○椎屋百代氏** 私も山田町商工会の女性部長とは仲よくさせていただいております、木村千種さんという元気のあるかき小屋で一生懸命働いてくださっている方なのですが、そのうみねこ商店街とまちなか振興会、その中にも商工会の女性部の方々も中には入られている方もいらっしゃいます、もちろん。

立ち位置的なものとしては、何かイベントがあれば一緒に協力するであったり、あと木村代表がいろんな御支援とかで来ていただいた方々を呼んでお振る舞いをするとか、そういったものの場所としても今のうみねこ商店街であったりとか、あとまちなか振興会の場所であったりというところでやっているような形ですので、お互いに協力し合っているというところはあるかなとは思っています。

**○大沢伸子委員** ありがとうございます。これからだと思うので、ハード面での復興はほぼこの地区も終わったと思いますけれども、私らもそうですが、今ソフト面で商工会のお母さんたち元気になろうということで一生懸命努力しております。今後ともよろしく願いいたします。ありがとうございます。

**○椎屋百代氏** ありがとうございます。

**○菅原悦子委員長** よろしいですか。

それでは、ほかにはいかがでしょうか。皆さん、何か質問や意見ありませんでしょうか。

では、両川さん、お願いします。

**○両川いずみ委員** いろいろ御活動ありがとうございます。御苦労さまです。

いろんなイベントをなさったりしているようなのですが、そういった企画会議の中で女性が意見を出して、それが反映されるということは何のくらいありますでしょうか。

**○椎屋百代氏** 新生やまだ商店街で言うと、半分は女性の方々が会議というか、打合せという感じで毎月1回会って話をするのですが、本部長が女性なので、結構意見は通しているという大変ですが、いろんなアイデアを出してこうやろう、ああやろうという形ではやっています。

**○両川いずみ委員** 安心しました。頑張ってください。ありがとうございます。

**○椎屋百代氏** はい。

**○菅原悦子委員長** その会議の構成が半分は女性だということですね。

○**椎屋百代氏** はい。

○**菅原悦子委員長** そうですね。そういう状況は、今、あなたがいらっしゃる地域では当たり前環境ですか。何かを決めるときに女性が半分以上関わっているというような状況は、あなたがいるところが珍しいのか、それとも一般的に行われているのかということはどうですか。

○**椎屋百代氏** どちらかという、新生やまだ商店街が珍しいかもしれませんね。私なんか会議でいつも女性1人なので、会議の中でぽつんと、いつも全員が男性だな、周り男性だなという会議のほうが多いのです。新生やまだはそれに比べれば女性の意見もちろん全部通すわけではないのですけれども、いろんなアイデアが出てくるほうが女性なのです。こうやろうよ、ああやろうよというほうがですね。なので、新生やまだのほうが逆に珍しいのかなとは思いますが。

○**菅原悦子委員長** ありがとうございます。そういうところに女性を増やしていくためには、椎屋さんの経験から、どのようなことがあれば、そういう会に女性が増えていくと思われるでしょうか、考えられますか。

○**椎屋百代氏** 新生やまだは、結構若い世代のほうなのです。大体会議に出る方というのは、大変申し訳ないのですけれども、ちょっと御年配というか、60代であったり、格式みたいな形で会議というのはあるのですけれども、新生やまだの場合はそういうのではなくて、本当にいろんなアイデアを出して、自分たちでできる事業をどうやって継続していくかだったりとか、こういうこと考えているのだけれども、どうだろうとかいう、そういった意見の話をする場であったりする、それを考えると若い年代の人たちが会議に出て、いろんな意見言って、話ししている、私も今40代後半になってきているのであれなのですけれども、30代であったりとか、私たちよりももう一歩若い世代の人たちにどんどん、どんどん参加してもらって、商店街の会員さんたちも御年配になってきていて、新しい人たちというのはなかなか入ってこなくて、新しく入ってきた人でも店主さんの奥さんという立場の方というのは商工会の女性部にはなかなか入って来てくれないとか、あと集まりにも来てくれないとか、こういった問題もあつたりするので、これからどう考えていくべきかということ、やっぱりもう若い世代の方々にどんどんバトンタッチしていく時期なのかな、そういうところに今来ているのではないかなというのをちょっと感じております。

○**菅原悦子委員長** ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

では、山屋さん、お願いします。

○**山屋理恵委員** 椎屋さん、すばらしい活動報告ありがとうございました。

先ほど椎屋さんが子育ての時間だとか、家事の時間だとか、そういうものがあると難しいとおっしゃっていました。ということは、そういう支援や仕組みがあれば、例えば子育てしている女性とか若い世代も、こういったお仕事とかマネージャーをやってみようとか、責任ある仕事、ひいてはそういう地域の役とかやろうというふうになるだろうと思われませんか。

○**菅原悦子委員長** いかがでしょうか。

○**椎屋百代氏** むふふふ。そうですね、そういう支援ができれば本当は一番ありがたい



なのではないかなとは思いますが。私もシングルで、震災のときは中学校3年生の男の子がいたので、結構てんやわんやしながら過ごしていた記憶があるのですが、そのときに少しでも、例えばちょっとどうしても時間が夜遅くまで仕事がかかりそうだったときに子供をどこかに預けられる場所であったりとか、そういった場所があると安心して仕事できたかなとは思いますが、私のほうは中学校3年生の男の子だったので、多感な時期ですので、あまりさわらないようにしておりましたので、そういったところは女の子とは違うところかもしれませんけれども、そういう手助けというのを気軽にできる場所があるといいのかなとは思いますが。

**○山屋理恵委員** そういう動きとか、そういう取り組みは山田町さんの近くとか、周りで何かできているとか、震災前と今とではやはりそういう人たちも活躍しようということで、何か取り組みが始まっているとか、畑違いとおっしゃったので、同じ業界のことで比べるのは難しいかもしれませんが、働いてそこで暮らしている中で感じられることというのはありますか。

**○椎屋百代氏** シングルの方は結構いらっしゃることは確かなのですが、それを支援する団体があるかと言われたら、私はちょっと存じ上げないです、山田町に関しては。ですので、やっぱり皆さんそれ相応に何かしら一生懸命お互いに努力されているのではないかなと思います。仕事と育児の両立を何とかやっているのではないかなと思います。

**○山屋理恵委員** 夫がいても、共働きの女性の場合は夫より1日4時間半家事、育児にかかって、人生で考えると17年間それに一緒に働いていても費やすというデータがあります。となると、シングルさんはもう1人で全部それ分け合える時間も余裕もなく、本当に大変だと思います。

ただ、そういう取り組みはやっぱりもっと広がっていったり、沿岸部は必要だなということですね。そうであれば、女性の人たちも働くでしょうし、びはんさんのようなスーパーさんには現場とかレジとか、そういうところで働く方は女性のほうが多いということですね、ちょっとそこは。男性も多いのですか、女性がやっぱり現場でそういう仕事をされているのですか。

**○椎屋百代氏** 正社員に限ると、正社員はやっぱり男性のほうが多いです。ただ、パートさんですね、短時間、4時間パートさんだったり、ちょっと長い時間の6時間、7時間パートさんというのは、スーパーという仕事柄やっぱり女性の方のほうが多いです。ただ、それ以上は逆に働けないという、そういったお声のほうが多いかなと、やっぱり自分の仕事をした後にすぐおうちに戻って自分の家の仕事をしますという方のほうが多いので、一歩踏み出すこと、正社員というところになかなか皆さん普通に踏み込めないのかなというところはちょっと一緒に働いていて思うところではあります。

**○山屋理恵委員** ありがとうございます。

**○菅原悦子委員長** いろいろありがとうございます。そろそろ時間なので、次の方に移りたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、椎屋さん、どうもありがとうございました。

**○椎屋百代氏** ありがとうございます。

**○菅原悦子委員長** また、意見交換のところでお話を伺うことがあると思いますので、

少しお待ちいただきたいと思います。

それでは、お二人目のNPOの伊藤さんのほうから子育て支援に関わっている状況についてお話を伺いたいと思います。よろしく願いいたします。

**○伊藤怜子氏** こんにちは。こそだてシップ代表の伊藤と申します。今日はこのような機会を与えていただきまして、ありがとうございます。

パソコンがとっても不慣れでして、御迷惑をおかけいたしました。今日はよろしく願いいたします。

ちょっと棒読みになるかもしれませんが、御容赦ください。

私たちの地域は、慢性的な医師不足の岩手県の中でも、特に医師が不足し、出産施設は1か所のみです。大震災前から産科開業医院も助産医院もありません。日常の細々した育児不安は、実母や身内、ママ友などが相談相手です。

2009年5月、私たち地元助産師有志は、地域の子育て支援のために母子サポートを開設しました。妊婦さんから未就学児を対象として、地域にもなじまれてきた頃、震災で2か月中断。

しかし、壊滅した町の子育てが身につまされ、2011年、免れた商業施設の一角で母子相談室を再開。地域は、交通も情報も遮断された最悪の状況でしたが、親子の駆け込み寺的に利用されて、6か月間で69組の母子、129人が来室しました。

町の中心地で再開した母子相談室は、東京都助産師会の皆様とつながり、2011年10月に大船渡市内と陸前高田市内に乳幼児母子のママ&ベビーサロンが開設できました。その大船渡の第1回ママサロン初日情景は今でも忘れられません。

当時町の中では、親子連れの姿はほとんど見ることもなかったので、サロンを開催しても果たしてとっていたところが、何と34組の乳幼児母子が集まりました。ママたちは、会場に入るや否や知人や友人を見つけて抱き合い、涙してお互いの生存確認でした。この日は激変した境遇を語り合い慰め合う交流で時間がどんどん過ぎ、私たちは開会の挨拶もプログラムも進められず、耳にするママたちの会話にもらい泣きしながら子供たちにてんやわんやしたオープンでした。

ママサロンでは、参加したくともできない親子に胸を痛めつつ、育児相談や支援物資の配布など、被災地で今できる母子支援を実施しました。ママサロンは、今ベビーサロンと改称し、大船渡市内では現在も継続、陸前高田市内は2017年2月に5年5か月で終了。2011年10月から2020年3月までのママサロン参加者総数は9,991人になります。

もう一つの活動は、赤ちゃん訪問です。大震災直後から被災地域に散在する母子や避難所生活の苦境が予想されつつも、活動の余力がありませんでした。

しかし、サロンを開設した翌月には、某避難所から「ここに赤ちゃんを連れた親子が4,5組いる、助産師さんに来ていただけないか」と電話要請あり、メンバーぎりぎりのサロン当日でしたが、出向きました。

そのような実態から、今本当に困っているママたちには、こちらから出向かない限り支援は届かないとスタッフ一同で再確認しました。

問題は、助産師不足です。仲間の地元助産師も被災したり、生活の激変で協力も限定的、地元以外の応援メンバーがそろわなければ、実現できません。

ここでも被災地支援団体に支えられました。東京都助産師会から毎月2名の助産師派遣が可能になり、日本財団から車も寄贈されて、2012年5月、本格的に巡回赤ちゃん訪問を開始、毎月2日間を2回、破壊尽くされ、地図も道路標識もない町を震災前の風景を思い出しながらかそだてシップ号を走らせ、要請された住所にたどり着きました。また、寸断された道路を迂回しながら妊婦さんや赤ちゃんを探し回りました。

あのような大惨事の非常時でも、個人情報保護法の壁は厚く、被災地に住む母子は全て自分たちの足で探し出し、出会った人たちの口コミが頼りでした。

気仙管内の避難所と仮設住宅団地93か所のほかにみなし仮設も巡回、活動の後半は要請があれば気仙管内のどこでも何度でも訪問しました。

地域には、震災ストレス、育児ストレス、孤立、軽鬱状態、経済的困窮、夫婦のトラブルなど、育児困難母子が散在。訪問メンバーは、傾聴を大事にして寄り添い、おむつやミルクや離乳食、日々の生活用品の支援物資の配布なども大変喜んでいただきました。

短期決戦のつもりで始めた赤ちゃん訪問でしたが、3年3か月間継続し、受益者総数は1,127人、こそだてシップ号走行は2万500キロ余りです。

被災地域で発信力のない育児困難者を探し、追い詰められる前のサポートは、行政との連携をなくしては実践できないことから、2013年8月、当団体は実績を添え、大船渡市、陸前高田市に連携支援が必要な、かつ実現可能な3項目について子育て支援要望書を提出しましたが、残念ながら一方的なアプローチで時が過ぎ、一項目も実現しませんでした。行政の多忙な時期でもあり、当団体の力不足もあり、悔やまれる経緯です。

災害で育児環境の破壊された母子支援は、スピード感を持ってその生活居住地に向き、安全、安心が届けられる赤ちゃん訪問は、最良の支援だと今も確信しております。

現在の活動です。現在の活動は、大船渡市子育て支援センターすくすくルーム運営が中心です。目標は、妊娠期から未就学児までつながる子育て支援です。

まず、子育ての大事なスタートとなるマタニティスクールを毎月1回、次に生後2か月から満1歳までベビーサロンを毎月2回、ベビーサロンを卒業後は小学校入学まですくすくルーム利用と、支援が途切れないような活動です。

しかし、新型コロナ感染の影響で、利用者は2年前の月間500から600人前後から現在は200人を超えることはありません。予約制、人数制限などもあり、リスクを抱えた母子が水面下に埋没することが懸念されてなりません。

次に、乳幼児の防災は、当法人の活動使命と認識し、2016年以来積極的に取り組んできました。今社会は、新型コロナ感染対策一色ですが、当法人は「育児も防災もどっちも大事！」というスローガンを掲げて、スタッフミニ講話、防災講演会、防災マフエスタ、防災強化月間など開催し、日頃から子供を守る意識の啓発を地域に発信し続けております。

産前産後支援は、大船渡市内のハイリスク妊婦と母子及び産婦対象として保健センター委託の母子支援です。産後ケアは、支援室以外の場所で毎月1回の開催です。

課題になります。課題は尽きませんが、最優先は助産師の確保です。大震災後地域

の大事な場になったすくすくルームですが、ここ数年運営の要となる助産師が地元では見つからず、このままでは活動の縮小につながりかねない状況です。

助産師はもともと全国的にも少ない職種でもあり、地域格差もあって当地域はなおさら深刻です。大震災の地元助産師仲間は残念ながら私をはじめ皆高齢となり、後に続く人材がなかなか確保できません。

当法人は、大船渡市のスローガンでもある「つながる子育て支援」を実践している団体です。マニュアル的になりがちな公的支援とは異なり、町の中で母子身近に細々とした育児を柔軟に寄り添える、地域には必須の活動と自負しております。民間ならではの広い子育て支援の展開も可能です。

幸い次年度は、北上市と陸前高田市の助産師に事業の一部を依頼できました。彼女たちの協力があるうちに対策を見つけなければならない状況です。

被災地の復興にとって赤ちゃん、子供たちは将来資源でもあり、まちづくりの基盤であると思います。その母子を支える地域の支援やサービスの停滞は、夢も希望も描けないような町の衰退にならないでしょうか。この町に1軒の助産院が開院されたなら、きっと地域が変わるなど度々想像してしまいます。

次に、災害と乳幼児の課題です。当地域は、10年前の大震災で未曾有の悲劇に見舞われました。いまだ本当に現実だったのかと思ひ起こしてしまいます。

当時私たち助産師は、本能的に母子の支援活動に動き、子育ての声なき声を拾って可能な支援を届けました。当法人は、そのような体験と教訓を活かす、乳幼児の防災を根気よく続けております。

しかし、大震災も月日とともに風化しつつあるのか、世代交代によるものなのか、育児の現場にこの備えがなかなか見えてきません。このままでは、またあの震災の再来になるのではなど不安は尽きません。もっと日常の育児に刷り込めるような備えの試みなどから、大震災被災地ならではの小さな命を守る取り組みに今足踏み状態です。

行政に求める支援として、まず地域に根づいた民間支援活動が消滅しないような継続的な支援をお願いいたします。

1つ目は、安心して子供を生み育て、未来のまちづくりにつながる官民一体の体制を構築してください。そのためには保護者、支援者の目線が生かされ、実感できる施策をスピード感を持って実行していただきたいです。

2つ目には、災害時では御近所、地域が即戦力になることから、その活動が保障されるように緊急災害時には個人情報保護法の壁を可能な限り低くしてください。

3つ目は、乳幼児は自分で自分の命を守れません。乳幼児の命と人権を守るために乳幼児の防災に特化した具体的な施策を打ち出し、災害弱者の母子を守ってください。

以上になります。ありがとうございました。よろしくをお願いいたします。

**○菅原悦子委員長** どうもありがとうございました。

それでは、委員の皆さん、伊藤さんのほうに何か御質問や御意見はございませんか。

では、両川さん、お願いします。

**○両川いずみ委員** 医師不足、または産科がない中で、やっぱり助産師さんの力は物すごく大きいし、今回の震災のときにも随分心強く、そうやって助けられた親御さんがいっぱいいるのだろうなと思っております。本当に御苦労さまでした。

それで、震災だけではなくて多分沿岸のほうでそういった医師不足だったりすると、どうしても助産師さんの開業助産師さんとかというところの道が多分これから開いていくのだと思うのですけれども、個人だけではなかなかできないので、先ほど伊藤さんおっしゃったように官民一体となってというところで、やっぱり官の方々と話しして、どこまでが自分たちがやれて、官のほうはどの辺までやって、自分たちが担えるところはどこだという、そういった線引きみたいな話合いの場をぜひつくっていただいて、実現していただければなと思います。

本当に私たちも震災すぐのときに新生児と母親を受け入れる、盛岡でやらせていただきましたけれども、震災のときの本当に弱者は生まれたばかりの赤ちゃんとか、まだどうしても体が戻っていないお母さん、それから心のケアとか、やっぱりすごく重大なところだと思いますので、今回の震災を教訓としてぜひぜひ何かのときにはそういったところにすごく力強く支援できる体制というのをつくっていただきたいと思います。

10年たってこちらのケアセンターが岩手医大にできたりとか、それから医師会、医大、あと県中心になってリエゾンというのですか、いろんな方々がつながって震災時の医療体制というのもつくられてきていますけれども、そういったところも民間とやはり併存できる、協働できる、相手が何をしているかがちゃんと見えるような形をつくっていただければ、本当に伊藤さんたちの活動もすごく生きると思いますし、私同じNPOとすると心配というのが資金源と、それから助産師さんであっても有資格者の方のやっぱり保障みたいなものとか、そういったものをどうなさっていたのか、それからこれからどうするのかというところをちょっと聞かせていただければと思います。

**○伊藤怜子氏** ありがとうございます。やはり最初はボランティアでスタートしたものですから、こういう活動でお金を確保するとか、もらえんとかは全然頭になかったのですけれども、途中から支援団体のある方が1枚のチラシを持ってきてくれたのです、地域創造基金だったかな（正しくは「公益財団法人地域創造基金さなぶり」）。それに、ここに応募して申請すれば活動の資金が得られるというところで、そこで初めてこの活動に資金が必要だったのだなというのを気づきまして、それからアンテナを張り巡らしまして、支援団体の方たちの情報から私どもの活動が通れるような申請というか、団体に応募してお金をずっと続けてというか、いろんなところから頂きました。

でも、そのときにすごく困ったのは、普通のレポートの書き方ではなくて、団体の委員の方たちが読んでイメージが湧くような書き方という独特なのですね、応募の書類というのは。そういうことに慣れなくてかなり苦労しまして、私もそれも支援団体の方に指導を受けながら書いて出しました。だから、ちょっと緊急、災害時にあのように手の込んだ書類を作るというのはなかなか大変なことだなと思って、いつかもうちょっとシンプルな書類で助成金をもらえるようにしてもらえないものかなと思った

り、そのような発言をしたこともあります。ということで、かなりアンテナを張り巡らして途切れないように、途切れないように頑張ってお応答しました。

**○菅原悦子委員長** いいですか。

**○両川いずみ委員** 苦勞とてもよく分かります。頑張ってお応答いただければと思いますけれども、本当に地域に必要な活動であれば、そこは先ほども言いましたように行政との連携のところで、連携というのは、することプラスやはりある程度の資金を頂けるということで確実な活動をできるようにその辺は考慮していただければいいかと願っております。頑張ってください。

**○伊藤玲子氏** ありがとうございます。

**○菅原悦子委員長** ほかにいかがでしょうか。どなたか。

では、平賀さん、お願いします。

**○平賀圭子委員** ありがとうございます。非常に大事な視点のお話を伺って、参考になりました。

私たちのNPOで一番最初に支援に現地に入ったときに、国際的な機関で乳幼児と、それから妊婦さんを支援する団体というのがあるのですね、国際的な機関なので。その方たちが何人かいらして、赤ちゃんはどこにいるのだというふうに聞かれて、そう言われて探しましたら、避難所にもどこにも赤ちゃん連れがないのですね。赤ちゃんを連れていては避難所に入っていられないということで、皆さんがそれぞれどこかへ消えてしまったということで、私もびっくりした記憶があります。ですから、国際的に災害が起こったときに真っ先に駆けつけてくれる、そういう機関もあるのだということで、日頃からそういうところの活動をキャッチしておられて、つながっているといいのかなというふうに思います。

確かに生まれた赤ちゃんにあげるミルクがなくてということで泣き込んで来られた方がいらして、私たちも盛岡でミルクを探して、その方のところへ届けたということなんかもありました。ですから、非常に心細い状態でいられる人が多いときに、やっぱりそういう支援する団体の存在は非常にありがたいなと思いました。ぜひ頑張ってお応答いただければと思います。よろしくお願いします。

**○伊藤玲子氏** ありがとうございます。今ミルクのお話が出ましたが、防災の災害の中ですごくミルクのことが問題になりますけれども、できればお母さんたちに母乳を本当に推進してほしい。勧めしてほしいのです。お母さんのためにも赤ちゃんのためにも、災害のときにも母乳というのはすべからず本当にすごい力を発揮します。

私は仮設新生児室にも呼ばれて行ったのですがけれども、6人のお母さんたち、大船渡病院でミルクをやっているときもあそこはもう必死に助産師も先生も母乳を飲む赤ちゃんにして送ってくれたから、避難所でも6人の赤ちゃんが元気でいられたのですね。母乳を飲ませると、お母さん自身にもオキシトシンというホルモンが出ましてすごい母性ホルモンで落ち着くのです。なので、私は防災対策の中に母乳推進もぜひ入れてほしいなと思います。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

ほかにいかがですか。どなたか質問や意見はありませんか。いかがでしょうか。

改めて震災のときのことを振り返ると、災害弱者、最も弱い人たちがどうだったの

かというのをもう一度振り返ってみる必要があるなど、今日伊藤さんのお話を伺いながら思いました。

乳幼児の今後の防災について、どこでどう議論しているのか、改めて女性の専門委員会でも確認をする必要がありそうな気がしたのですけれども、いかがでしょうか。何か質問や御意見はありませんか。いいですか。

それでは、お二人の方からいろいろ御意見を伺い、委員同士の意見交換もいろいろ進めさせていただきませうけれども、一応ここでお二人からのお話を聞いての意見交換は終了させていただきたいと思ひます。

椎屋さんと伊藤さんには、この後この会から退場していただきますけれども、その前にこの皆さんとのやり取りをしながら、何か感想やぜひ私たち女性参画委員にこんなお話ししたいこととか、最後ありましたら、一言ずつお願いしたいと思ひます。いかがでしょうか。

初めに、椎屋さんのほうから何かありますか。ありませんか。

**○椎屋百代氏** やっぱり沿岸のほうがどちらかというとな女性が活躍している場というのが少ないのかなんていうふうになちょっと感じておりますので、ぜひそういった活躍の場がどんどん広がって、あともしかしたらやりたくてもやれない人も中にはいるかと思ひますので、そういった支援だったり、そういったのをお願いできればありがたいなと思ひます。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

それでは、伊藤さん、いかがでしょうか。

**○伊藤玲子氏** 私は、やっぱり子育ては地域づくりの基本だと思ひますし、いろんな意味でみんなが周りが明るくなります、赤ちゃんや子供たちの顔を見て笑顔を見ると。だから、そういう笑顔が絶えないような行政のほうの施策で何か具体的にやっていただけたら、とてもありがたいです。

**○菅原悦子委員長** お伺いしました。ありがとうございます。

それでは、伊藤さんと椎屋さんには本当にお忙しいところ、貴重なお話を聞かせていただきまして、本当にありがとうございます。これからまた委員の皆さんで今日お伺いした話を少し深めてまいりたいと思ひます。これからのますますの御活躍をよろしくお願ひをして退室をお願いしたいと思ひます。

本日は本当にお二人、大変貴重なお話を聞かせていただいてありがとうございます。

**○伊藤玲子氏** ありがとうございます。失礼します。

**○椎屋百代氏** ありがとうございます。

### (3) 委員による意見交換

**○菅原悦子委員長** それでは、これからの時間は、3時までの限られた時間ではありますけれども、今日のお二人の発表をお伺いして、私たち同士の意見交換に移りたいと思ひます。

いかがでしょうか。今日のオンラインで現地調査をしたということになりますけれども、皆さん、今日の現地調査はどう振り返りたいと思われているのか、少し皆さん

から一言ずつ意見とか感想でも結構ですので、お伺いできればと思いますが、いかがでしょうか。どなたからか手を挙げていただくと助かります。

では、両川さんからお願いします。

**○両川いずみ委員** 先ほど椎屋さんのお言葉の中にスキルアップの時間がないというお話があって、やっぱりもちろん震災絡みの話でもありますけれども、スキルアップするというのをこれからいろんな制度が進んでいったり、女性の地位も向上するというふうなときにやっぱりスキルアップする時間とか機会を与える、与えられる、またはそれを自分でつくるというのもそうなのですから、そういった環境づくりが必要ではないかと思っています。

それで、スキルアップした場合に、それに対する対価というと変ですけども、ただスキルアップを個人がして、ああ、それはあなたの力になったわねだけではない、やっぱり評価みたいなものもついていく世の中であれば、なお皆さんも頑張ってスキルアップしていったり、いろんなことができるのではないかと、これは女性だけではなくて男性にも言えることだと思いますけれども、今の椎屋さんの言葉を聞いて、やっぱりスキルアップという機会をすごく大きくいろんな方面で考えていく必要があるのではないかと思います。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

ほかにはどうでしょうか。どなたからでも結構ですので、順番にお話ししていただきたいのですが、いかがですか。

では、当ててしまいますけれども、手塚さん、どうですか。

**○手塚さや香委員** 私も椎屋さんのところで質問もさせていただいたのですが、そもそも論の部分で椎屋さんに関してはシングルで子育てされているということだったと思うのですが、パートナーというか、旦那さんがいる家庭の場合は職場とかの理解もそうですけれども、家庭内での分業みたいな部分の意識がどうなっているのかなというところがまだまだ課題が大きいかなと思う反面、やっぱりその辺りというのは行政とかが手を突っ込んで意識を変えさせるというか、変えるというのも難しい部分なので、なかなか古くから言われていることですが、そういう家庭内での役割分担みたいなところの課題もまだまだあるのかなというふうに、ちょっと今日の話とは直接関係ないので、感じました。

以上です。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

では、平賀さん、どうでしょう。

**○平賀圭子委員** ありがとうございます。今日のお話大変面白かったのですが、椎屋さんのお話を伺っていて、この方は大分県出身で、いろんなところでいろんなことをなさりながら山田へ入ってきた方で、こういう方も山田町でちゃんと受け入れて皆さんの中でリーダーとして存在できているのだなということで、私は少し変わってきたかな、震災がきっかけだったのかもしれないけれども、なかなかよそから入ってきた人を受け入れ難い体質がありますよね、岩手は。そこがちょっと抜けたのかなというふうに感想を持ちながら聞いておりました。これは一つのチャンスなのでね、そ



ういうところへどんどん入って行って、やっぱりどんどんやって行って実績をつくっていくしかないのだろうなというふうに思いました。頑張っていたきたいなというふうな感想です。

それから、子育てのほうのお話は、私はこれはぜひ行政も一緒になって子育てサロンみたいな子供を育てている幼児を抱えているお母さんたちが集まりやすい場所の設定というのはどこでも必要だと思うのですね。ただ子供を増やしたいと思っていても育てられる環境がないと難しいので、これはやっぱりどんな小さな町でもそういう赤ちゃんとお母さんが集まれるような場所の設定というのできると思うので、そこに専門職の助産師さんや何か加わって一緒に子育てができればどんなにいいだろうなと思いつながりながらお話を伺っておりました。以上です。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

それでは、山屋さんに行ってしまうていいですか。

**○山屋理恵委員** 本当にこのように活躍している人たちが全然行政といまだにうまくつながっていないといいますか、そこに反映されているような取り組みにつながっていないのかな、困り感とか、働き方とか、子供のこととか、10年たってもなのだなというのを今日特に感じました。

さっき手塚さんがおっしゃったように、前提としてこの人たちだけが頑張っても難しく、子育てだとか人も一緒にこの地域で働いて生きていくというためには、本当に役割分担とか意識改革からしなければならぬのがまだまだなのだなというのが今日の実感です。

ああいう大きな甚大な被害を受けたところであれば、本当に一人一人大事にしてみんなが参画して力を合わせて地域づくりや仕事をしていかなければならないはずなのに、それがこの現場で、岩手でこういう声や、まだできていないというところがすごく何かちょっとつらいなと思えました。

多分私が今男女センターでお仕事させていただいているのが震災4年くらいたってから、5年たってからなのですね。一生懸命その現場で頑張ったとしても、こういう地域の人たちの声現場で拾われていない、被災地で拾われていないということはどうしたらいいのだろうと、何かすごいですね。今胸がちょっと詰まって、何かどうしたらいいのだろうなと思っています。

そして、また大きな何か災害が来てしまったら同じことを繰り返すのかなとかというように思っているので、やはりそういう役割分担のことも県でも性別役割分業意識をなくそうよという宣言（正しくは「性別による固定的な役割分担意識をなくそういわて宣言」）を知事が2月にすごいことを出しているのです、全国でも初めて。でも、それももしかしたらあまり広まっていないのかな。広まれば、もう少し偏らなくて、例えばそういう会合だって夜中だとか、女性でも参加できるような時間に変更するだとか、少しずつ変わるのかなと思うのですが、まだまだ取り組みは必要なのだなということを実感しました。すみません。ちょっとショックが大きくてですね。

以上です、すみません。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

それでは、大沢さん、お願いします。

**○大沢伸子委員** 今山屋さんのお話を伺っていて、私は野田村に住んでいまして、参考になるかどうか、ちょっと野田のことをお話ししたいと思います。

伊藤さんの発表を聞いて思ったのですが、野田村の場合は保健センターが毎年生まれた赤ちゃんを、どこの行政でもそうだと思うのですが、必ずきちんとチェックして、私はボランティアでブックスタートという活動をしております。生後5か月の赤ちゃんを保健師さんがほぼ強制的に保健センターのほうへおいでください、健康相談しましょうと集められるのですね。そこへ私たちボランティアが行って、生後5か月の赤ちゃんに実は絵本を読んであげたり、歌ったり、踊ったり、そういう活動をしております。

そういう活動の中に保健師さんの日頃困っていることはありませんかとか、お母さんに対しても優しく指導なさったり、やっぱり初めてお子さんを持ったお母さんというのは不慣れなものですから、いろんなことが不安で聞いていらっしゃる。そうすると、私たち年配の経験者が「そういうことあるわよ」とかいろいろなかみ砕いてお話しするので、そうすると、意外とヤングママたちはほっとしたような顔をして、「ああ、よかった、じゃ、これでいいんですね」と、「うん、いいの、いいの」というふうにして、そういうことを毎月1回ですけれども、やっております。

あと、もう少し大きくなった幼稚園、保育園児、あと小学校低学年の子供さんには教育委員会の協力を得てキッズセンターのお手伝いをしたり、もちろん小学校へのボランティアで読み聞かせにも行ったり、とにかく子供は地域の宝だということをモットーに、野田村自体がコンパクトで小さなところですから、非常にまとめやすく、まとまりやすくというのか、一生懸命励んでおります。何でもそうですけれども、一つずつこつこつとやっていけば、必ずそれは結果として見えてくるのではないかなと思っております。

問題なのは、商店街の再建がいま一つなかなかうまくいなくて悩んでいるところでございます。

以上です。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

それでは、今回初めての御参加ですけれども、中里さん、いかがでしょうか。

**○中里登紀子委員** 初めて参加させていただいて、お二人の震災後のお話を聞いて、何か胸に詰まるものがございました。同じ女性として私は何ができるかなとか、いろいろ考えさせられる時間をつくっていただき、ありがとうございます。

女性のスキルアップは本当に難しいと思います。目標や対価があったとしてもそれを見つけるということがなかなか難しい環境だと思うのです。私も皆さんもそうだと思うのですが、震災から立ち上がってきて、さて、次は何しようと思ったときに、目の前にあるものを越えていくのか、もっとスキルをアップしていくのかというのは誰かのアドバイス、そして支援があってこそ出来ることだと思います。そういうことは行政の方の支援で目を外に向けていくとか、何かの手だてがないと難しいのかなというのは思いました。私も子供3人育てしながら仕事をしてきましたが、誰かが手伝ってくれないとなかなかスキルアップ、就業の継続はできなかつたと思うので、やっぱり行政の方がもうちょっと何か手助けしていただければいいかなと思います。

また、うちの娘は夫の勤務先長崎にて1人で子育てをしています。毎週のように子育てサロンとかすすく教室とかに参加してとても助けていただき、楽しんでいるようです。子育て支援に厚い地域だと感じました。大船渡のお話を聞いてきて、さつき野田村のお話を受けて、沿岸にそういうふうに1か月に1回ではなく2週間に1回、または毎週どこかで子供と参加できるような場があればいいと感じました。また、それにより年代を超えた繋がりもできると思います。たとえば、今日は行けるけれども、あしたは行けないとか、1か月に1回だと次行けないとまた来月というように空いてしまうことになると思います。妊婦さんもちよっと増えてきたので、子育ての楽しい場で、交流ができ、母親、赤ちゃんや子供たちが守られ、育てられるような環境をつくっていただければいいのではないかなと思って聞いていました。どうもありがとうございました。

○菅原悦子委員長 ありがとうございました。では高橋さん。

○高橋弘美委員 何か最初から私は地元が気持ちが行ってしまっていて、感想だけあれしてしまいましたけれども、頑張ってもらいたいというエールは常々送っていますので、これからは子育ての件で私地元の滝沢は恵まれているけれども、もし防災のことで何かあったときどうしようかと、そればかり考えて、また余計な心配していましたけれども、防災会議できちんと発言していけるような環境づくりに努めたいと思います。みんな遠慮していて男性の中で私だけなので、そういう立場でやりたいと思います。

以上です。ありがとうございました。

○菅原悦子委員長 盛合さん、何か。

○盛合敏子副委員長 私ちよっと話がずれるかもしれませんが、10月1日でしたが、早稲田大学のほうから講演依頼が来まして、震災のときのことを話をしてほしいというようなことの御依頼でございまして、お話しさせていただきました。

ただ、東京の人たちには震災があったというのは伝わっているのだけれども、どういう状況だったとか、どういうことを女性たちがしたのかとか、そういうのは全く伝わっていませんでしたね。学生さんたちは初めて聞いたと、後から感想もいっぱいいただきましたけれども、こんなだったとは知らなかったと、テレビやニュースでは見たけれども、そういう状況下であって、それからこのように女性たちが活躍して頑張っているのを知らなかったというような学生さんたちから御意見いっぱいいただきまして、ああ、そうだったのかと、自分でも皆さんから御支援いただいたのは皆さんの気持ち、全国皆さんの気持ちと思って受け止めてはいたのですが、実際の話はそのような状況に被災地になっていたというのは知らなかったというのはまたショックでございましたが、それを踏み越えて私たちこうやって10年こうしてきたわけですが、途中から入ってきてちよっと申し訳なかったのだけれども、地域変わってきたというのが正直な感想です。都会にいる方々は分からないかもしれないけれども、田舎にいるとまともに受けます、それは。皆地域の状況が変わってきたし、それから個人、個人の考えも変わってきたし、もう個人は自分を守ることがやっぱり一番になってきました。それはいいのだとは思いますが、ではそれで地域が成り立っていくかという成り立ってはいかないのだろうか、この先な、ということで、代表としてやっている者にとっては年代的にもいろんな方々がいるし、それから女性たち

の中にもいろんな考えがあるし、それをどうやってまとめていくかと。私たちみたいにこうして社会にいっぱい出て思ったことをしゃべっている人たちにとっては大変だよと、これからどうやっていったらいいかと、地域をつかっていったらいいとか、どうやってみんなで共同体をつかっていくとかというのを考えるのだけれども、そうではないという人たちもいっぱいいるわけです。

だから、そのこのところの課題を私はこうやっているいろんな震災のときどうだったとか、子育て支援と東日本大震災というようなことでやっているけれども、そこに行くまでのベースというか、そこをきちんとやっばり私たち女性たちが、男性は無理だと思います、正直申し上げます。男性いらっしゃるけれども。女性がどうやって頑張っていくかと、どうやってつくっていくかというのは、本当に一緒になって考えていかななくてはならないと思いますので、何とかそのこのところは菅原先生、リーダーとして引っ張っていただきたいなと思っておりますので、よろしくお願いします。

**○神谷未生委員** 椎屋さんのところで女性がこの状態で労働時間とか、環境とか考えると、なかなか子育てしながらやるというのは難しいとおっしゃっていたところで、私もすごくそこは感じるものがあって、今うちの団体でたまたま 15 名程度の女性が雇用できていて、子育て世代のお母さんたちも多いのですが、それはもう変な話、私を褒めている、自画自賛しているわけではなく、純粹に自分も子育てしているというところでその苦勞が分かるから、そこに働きやすい環境を整えてあげられてはいるのですが、そこは個人とか一民間団体の努力ではやっぱり限度があるなというところで、何かしらもうずっと全体の世の中の仕組みとして働きやすい環境なり、女性が研修を受けるとかというシステムがやっぱりあることがすごく大切だなと思います。

私も団体運営している中で、いろんな研修とかを受けに行きたいのですが、やっぱり保育園が土曜日かなり事前に 1 か月前に申し込んでおかないと土曜保育ができないとかとなると、研修とかはポンと来たりするし、逆にオンラインが広まってよかった反面、日曜日に研修とかも結構多いですね。そうすると、もうそっちはベビーシッターどうするのだという話になってくるので、そこも含め従来の保育園が、保育士さんたちへのサポートは物すごく大切なので、そこをきちんと手厚くした上でもうこれだけ多様な働き方がある中で、保育園の 99%までが土日はあまり預からないとか、日曜日は確実に預からないみたいな方法は、ちょっともう女性が頑張って働くみたいな世の中にはなっていけない根本なのかなという気はしているので、そういうシステム変更がぜひ今後岩手県として考えていっていただきたいなというふうにお二方の話を聞きながら思っていました。ありがとうございます。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

それでは、皆さんからいろいろたくさん意見が出ました。改めて沿岸山田の椎屋さんのお話で、若い女性が活躍してもらおうと地域が元気になるというようなお話がありましたけれども、まさにそういうことが大切だと思います。そのためにもやはり子育て支援のところがしっかりしないと若い女性に活躍はしてもらえないことになると思います。

伊藤さんのお話では、子育て支援において、まだまだしっかりと行政と民間がうまくコラボできていないよという御指摘があったわけです。子育て支援をどうしていけ

ばいいのか、NPOや行政と一緒に頑張って働きやすい環境はどうしたら整えられるのか特によく考えていただきたい。沿岸の地域では特にその辺が重要なのではないのかと改めて今回思ったところです。

それから、震災直後には災害弱者の話が随分出ていたので、私もいろいろ考えていましたが、少し忘れていたように思いました。防災委員会になる女性の参画の話の前回は前回もしていたと思いますが、改めて女性の参画の必要性和、その中でも乳幼児と防災については、一体どのような状況になっておるのかの確認が少し抜けていたような気がいたします。改めて、この辺について県としてはどのような対策が考えられているのかをぜひ今度お聞きしたい気がしたところです。

ということで、今日の現地調査の意見交換会については終わりにさせていただきたいと思います。

それで、最後に11月に釜石で「ぼうさいこくたい」が開かれて、そのときに神谷委員がハイレベルセッションのほうに登壇なさったということをお伺いしていますので、ぜひ「ぼうさいこくたい2021」の感想を時間が押していますが、一言お願いできますでしょうか。

**○神谷未生委員** カメラオフのまま失礼します。何かハイレベルセッションというものに呼ばれていいのだろうかという疑問をむちゃくちゃ持ちながらの参加でした。

でも、結果やっぱりいろんな釜石、大槌のみならず、東京であったりとか国際的な機関からの方々と同じテーマで話し合うというところで、広い視点からの知見が得られたのはすごく嬉しかったなというふうに思います。

これは多分総務省のほうでも、あと県の方々、そして釜石の方々が意識してくださったのかなと思うのですが、女性はかなり多く登壇していると、少なくとも私の参加したセッションでは女性が半数ぐらいいるという状態での参加だったので、そこもやっぱり非常に女性だからこそその視点はそういえば別に大したことをしゃべっていないような気もするのですが、でもやっぱりここ欠けているよねみたいな視点は出てくるので、女性がたくさんいることによって出てきた話題であったりしたことが、すごく嬉しいなというふうに思っています。

多分唯一地元で言われたのが、基本オンラインをベースにするというのは大前提だったからだとは思いますが、大槌町でも「ぼうさいこくたい」のチラシ1枚見たことがないのですね。おしゃっちの運営をしているのですが、おしゃっちはかなりの量のポスターとかチラシが届く場所で、ここでもおしゃっちで飾るのか？ぐらいのまでも来るのです。おしゃっちにも届かなかったのですよ。なので、あえてオンラインなので、会場に誘導するようなチラシは置かないのだとしても、そもそもそれオンラインですらやっているよという告知がオンラインでしかされないと、そこにアクセスする人しか見ないよねというのはすごく違和感があって、結局大槌町から隣の釜石にたった15分の距離で来ていたのは、私が出たのでは10人いないぐらいなので、そこは今後ぜひ県のほうであったりとか・・・絡む中でも、たとえオンライン開催でも紙媒体の周知は必要ではないかなというところはあえてこの場をいただいたので、上げさせていただこうかなと思います。ありがとうございます。

**○菅原悦子委員長** ありがとうございます。

それでは、県のほうからも今回のぼうさいこくたい 2021 の成果などが発表になると  
思いますので、オンラインでぜひみんなアクセスして読ませていただこうかと思いま  
す。ありがとうございました。

それでは、あと皆さんのほうから何か、よろしいですか。

#### (4) その他

**○菅原悦子委員長** よろしければ、その他は何かありますか。よろしいですか。何か  
急ぐようであればですが、時間ちょっとオーバーしてしまいました。

それでは、質疑は終わらせていただいて、進行を事務局のほうにお返ししたいと思  
います。

**○米内復興防災部復興推進課主幹兼推進担当課長** 菅原委員長、大変ありがとうござ  
いました。皆様、大変ありがとうございました。

意見交換につきましては終了とさせていただきます。

#### (5) 閉会

**○米内復興防災部復興推進課主幹兼推進担当課長** それでは最後に、戸館復興防災部  
長から一言御礼申し上げたいと思います。

**○戸館復興防災部長** 委員の皆様には長時間にわたりまして熱心に調査、意見交換あ  
りありがとうございました。

今日山田町で実際に事業をされ、そして管理職の立場にある椎屋さんのほうから、  
私が印象に残りましたのは、新生やまだ商店街の企画をする際に女性の方が半分いら  
っしゃって、アイデアがどんどん出てくるという話が非常に印象に残りました。やっ  
ぱりそういう仕掛けにしていけないといけないのだろうなというふうに思いますし、  
ただそういった中で女性がキャリアアップしていく、スキルアップしていく上で子育て  
であったり、家事であったりというところの負担がなかなか厳しいものがあるとい  
うふうなお話をいただきました。

そして、こそだてシップの伊藤さんからは、まさに子育てに関するさまざまな御苦  
労のお話もお聞きいたしました。乳幼児の防災というお話ありましたがけれども、昨日  
日本海溝、千島海溝の地震の被害想定も国のほうから発表されまして、県のほうでは  
さらにこれを市町村ごとに深掘りをしてということ今作業を進めていますけれど  
も、防災を考える上での重要な視点を提示していただいたと思いますので、県のほう  
の今後の作業にもぜひ生かしていきたいなと思います。

山屋さんからは意識改革というお話がありました。さまざまな場面で意識改革の必  
要性というのは言われるわけですがけれども、なかなか意識を変えようといっても変わ  
らないというところもあって、仕組みを変えるとか、構造を変えるとか、今回お話し  
いただいた椎屋さんのようにあるところを突き抜けて活躍されているような、そうい  
ったモデルになるような方がどんどん出てくるということも大事だと思います。そこ  
から意識というのは変わっていくのではないかなというふうにも思いますので、そう  
いった仕組み、仕掛け、モデルづくりというところを行政としてどう更新していける  
のかというあたりをしっかりと考えていきたいと思います。

子育てに関しましては、月曜日に、いわてで生み育てる支援本部というのを県でも立ち上げています。もう総合力でやっていくべき分野で、これは保健福祉だけの分野の話ではなくて、経済、雇用、様々な分野にまたがってくる話でありますので、この本部委員会議の中でも今日いろいろ出された御意見などもぜひお示しをしながら議論していきたいなというふうに思います。

今日は本当に長時間ありがとうございました。

**○米内復興防災部復興推進課主幹兼推進担当課長** ありがとうございました。

改めまして、本日のオンライン現地調査、大変お疲れさまでございました。

これをもちまして本日のオンライン現地調査、終了させていただきます。

なお、次回の第 19 回女性参画推進委員会でございますが、こちらのほう委員の皆様にも御案内させていただいているところでございますが、年明け 2 月 14 日月曜日 14 時からサンセール盛岡、あとオンライン併用で開催させていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

本日は大変ありがとうございました。